

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380257

研究課題名(和文) 経済危機と経済学：1990年代日本における経済政策と経済政策思想

研究課題名(英文) Economic Crisis and Economics: Economic Policy and Policy Ideas during the 1990s Japan

研究代表者

若田部 昌澄 (Masazumi, Wakatabe)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：00240440

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、当時内外の経済学者の間で戦わされた経済論争を詳細に検討し、日本経済の停滞の原因を構造的要因に求める見解とマクロ政策の失敗と捉える見解を中心として経済政策思想に分裂状況が見られたことを明らかにした。第二に、過去の経済危機と比較した。1990年代の経済危機は1930年代の大恐慌と類似しており、実際に90年代の論争への参加者はそれを意識していた。第三に、第二次安倍晋三政権のもとでの経済政策、いわゆるアベノミクスは1990年代の経済停滞を招いた政策の失敗の訂正を意味するものと考えられる。ただし、経済政策思想の分裂は現在も継続しており、それがアベノミクスの今後についても影響を及ぼすと考えられる。

研究成果の概要(英文)：First, this research project examines the economic controversies during the 1990s Japan, showing that there were serious divisions and clashes of economic policy ideas, especially between the one which attributes the cause of Japan's Great Stagnation to structural factors and the other which attributes the cause to macroeconomic policy failure. Second, compared with other economic crises such as the 1930s Great Depression and the 1970s Great Inflation, Japan's Great Stagnation has a lot of affinities with the 1930s Great Depression: this has been recognized and used as an inspiration for some participants of the controversies. Third, from this research's perspective, Abenomics, the new economic policy initiative under the Second Shinzo Abe administration since December 2012, is to be interpreted as providing a correction to the macroeconomic policy failures of the 1990s. However, the divisions and clashes of economic ideas have still remained today, which would influence the future.

研究分野：経済学史

キーワード：経済学史 日本経済 1990年代 経済危機 経済政策 アベノミクス

1. 研究開始当初の背景

(1) 2007年からの金融・経済危機の発生によって1990年代の日本の経験は改めて注目を集めている。特に欧米各国では日本のように停滞が長期化するといういわゆる日本化(Japanization)の懸念が表明されている。

(2) 研究代表者は、これまで研究代表者として 基盤研究(C)平成18年度-20年度研究課題「経済危機の歴史政治経済学：大恐慌期の経済政策と経済学」、および 基盤研究(C)平成21-24年度研究課題「経済危機と経済学：1970年代日本のマクロ経済思想と経済政策の歴史的考察」の交付を受けてきた。では、1930年代の大恐慌という現代史上最大級の経済危機を経済事象、経済政策、経済政策思想の相互依存関係から分析した。では、1970年代の大インフレ期に移行して研究を進めた。そこでは、日本銀行の政策思想に焦点を当てる研究と、日本のマクロ経済思想にみられる特徴を日本独特のケインズ理解とマネタリズムの相対的な劣勢さに求める研究とを行った。

(3) 日本の90年代の経済危機についての研究は汗牛充棟である。主だったものでも、内閣府経済社会総合研究所の研究(内閣府経済社会総合研究所編『バブル/デフレ期の日本経済と経済政策』内閣府経済社会総合研究所、2009-2011年)、林文夫編『経済停滞の原因と制度』(勁草書房、2007年)などの大規模な共同研究がある。また、海外の研究者の関心も持続しており、単独の研究ではつい最近も元早稲田大学教授ウィリアム・ガーサイドの研究がある(Garside, W. R. (2012), *Japan's Great Stagnation: Forging Ahead, Falling Behind*, Chetenham: Edward Elgar)。

しかし、この時代の特徴である経済論争に焦点を当てた研究は少ない。そのうち専修大学教授野口旭によるものは1980年代後半から90年代前半までを扱っており先駆的な業績である(野口旭「平成経済政策論争」『経済セミナー』2005年4月号~2006年2・3月号)。さらに研究代表者も参加した野口旭編『経済政策形成の研究 既得観念と経済学の相克』(ナカニシヤ出版、2007年)では90年代後半のデフレと金融政策の議論も扱っている。しかし論争の視野は基本的にマクロ経済政策の周辺に限られており、不良債権問題、金融危機、規制緩和といった領域における論争についての議論は副次的である。さらに現在の経済論争からさかのぼって歴史的背景を掘り下げた論文は少ない。また経済論争を考察するには、経済論争の場としての経済メディア、ジャーナリズムについての研究が欠かせない。この点について研究代表者は2012年度に早稲田大学現代政治経済研究

所において「経済ジャーナリズムの研究」を行っており、同年度後半には「90年代経済報道の検証」をテーマに経済学者、ジャーナリストの方々の意見をうかがっている。

(4) 今回の研究課題は、これまでの研究課題の着想の延長線上にあると同時に、それを発展させたものである。現在の経済危機にとって内外からもっとも関心の高いのは大恐慌の研究を除けば1990年代日本の経済危機の教訓である。経済危機の研究はすでに多角的に行われてきたが、経済論争に焦点をあてたものは少なく、また日本の研究者が海外に発信をする責務と優位性がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究「経済危機と経済学：1990年代日本における経済政策と経済政策思想」では、1990年代日本で起きた経済危機をふりかえり、1)経済学が経済危機にいかに対応したか、2)経済危機が経済学にどのような影響をもたらしたかという二つの観点から歴史的に研究する。その目的は危機の時代にはいかなる経済政策を運営するのが望ましいか、そして危機の経験から経済学は何を学ぶのかという問題に、経済学史の観点から国際的に発信できる教訓を得ることにある。

(2) より具体的な目標は四つある。第一に90年代大停滞における経済論争の構図の解明である。この時代は、国際経済摩擦、バブルの発生と対応、資産デフレ、財政再建、規制緩和、金融危機、構造改革、デフレと、経済政策の焦点はめまぐるしく変化した。その変化する論争において共通する要素は何か。経済学の進展とどのように関わっているのか。これについては文献展望と論争の概略の提示という予備的な作業は終わっている(文献)、『危機の経済政策』(文献)では「危機の30年」という視点を提示した。これは日本の大停滞の発端が1985年のプラザ合意後のマクロ経済政策の失調にあるという視点である。ここからさらに国際通貨制度をめぐる政策と政策思想史を分析することが必要である。

(3) 第二に、経済論争の歴史的背景の解明である。これについては、日本の経済学と経済論壇の特徴を明らかにする作業が必要である。これまで戦前から戦後にかけて日本の経済学史についての研究を行っており、予備的な成果を得てきた。

(4) 第三に、現在および過去の経済危機と比較しての日本の大停滞の経験から得られる教訓の導出である。とくに研究代表者がこれまで進めてきた1930年代大恐慌、および1970年代大インフレについての知見

と、現在進行中の経済危機についての内外での論争を比較する。

(5) 第四に、危機の時代にいかに経済政策を運営するべきかという問題に、経済学史の観点から一つの示唆を与えることである。すでに研究代表者は『危機の経済政策』(文献) という著作を書き、1930年代大恐慌、1970年代大インフレ、1990年代大停滞、現在の経済危機について研究史の概観、実際の経過、当時の経済思想との関連をまとめる作業を行っており、予備的な結果を得ている。また1970年代大インフレについては、さらに研究を進め成果を発表している。研究代表者がこれまで複数の経済危機を研究してきたことは、1990年代日本の大停滞と現在の経済危機を比較研究する上で優位性をもつと考えられる。経済政策の形成には政策思想が大きな影響していること、その結果として経済成果が左右されること、そして成果は次に政策思想に影響を与えることが確認されている。ここからさらなる教訓を引き出す作業が残されている。プリンストン大学教授ポール・クルーグマンは、90年代日本は、今回の危機に対する「リハーサル」の役割を果たしたと述べている。クルーグマンは望ましい政策対応について指摘しているものの、現在欧米で起きている経済論争をみると日本との共通性にはより大きなものがある。「日本化」が懸念されている現在は、90年代日本の経済論争を振り返るのに格好の機会であると考えられる。

3. 研究の方法

本研究の方法論としては、基本的には経済学史の方法論に基づきながら、次の3点に留意した。

(1) 三つの歴史：マクロ経済理論史、マクロ経済政策史、経済制度史を組み合わせること

(2) 二つの評価：政策効果評価と政策形成過程評価を組み合わせること

(3) 一つの叙述：理論的枠組みと計量分析を重視して、「印象バイアス」を避け、理論に裏付けられた歴史叙述、いわゆる分析的叙述(analytic narrative)をめざすこと。

4. 研究成果

(1) 第一の研究成果は、1990年代の日本の経済危機をマクロ、ミクロ両面における政策の失敗と捉え、当時の日本の経済政策思想と経済政策との関連を探ったことである。ことに、当時内外の経済学者の間で戦わされた経済論争を詳細に検討し、日本経済の停滞の原因を構造的要因に求める見解と、マクロ政策の失敗によるものと捉える見解を中心

として、経済政策思想に分裂状況が見られたことを明らかにした。

(2) 第二に、過去の経済危機との比較研究を行った。デフレ不況という点で、1990年代の経済危機は1930年代の大恐慌と類似しており、実際に90年代の論争への参加者はそれを意識していた。1930年代の大恐慌との比較は図書、 で、1970年代の大インフレとの比較は図書 で行った。また大恐慌期の経済政策と経済政策思想については、論文 として成果が得られた。なお、論文 は2017年中に刊行予定である。

(3) 第三に、2012年12月に成立した第二次安倍晋三政権のもとでの経済政策、いわゆる「アベノミクス」については、歴史的な評価を行うのはやや時期尚早であるものの、本研究での研究視角からすれば、アベノミクスは1990年代の経済停滞を招いた政策の失敗の訂正を意味するものと考えられる。そのような観点から、アベノミクスとの比較も行った(図書、 、 学会発表、 、)。ただし、経済政策思想の分裂状況は現在も継続しており、それがアベノミクスの今後についても影響を及ぼすと考えられる。

(4) 研究成果については内外での学会発表を積極的に行った(学会発表 から)。

なお、経済学史に留まらない、より広範な層に発信するために、Western Economics Association Internationalでも発表した(学会発表)。

(5) 図書(、)に見られる一般向けの啓蒙活動。ことに図書、 では90年代の日本の大停滞と関連付けながらアベノミクスについて解説している。 では70年代の経験を含むマネーの歴史について説明している。図書、 は、研究(1)の成果を現代のデフレ不況をめぐる論争に応用したものである。基本的には日銀の経済政策思想が金融政策を決めており、90年代以降の金融政策の失敗も政策思想の問題であることを論じている。 ではやはり(1)のエッセンスを生かして、より歴史的な記述を行っている。

(6) 日本からの海外情報発信を心掛けた。その結果、論文1本(論文)、英文単著を含む図書3本(、 、)、海外学会発表4回を得た(学会発表、 、 、)。なお は の改訂版である。また、国内学会での発表でも海外からの聴衆がいることを念頭に英語で発表した(学会発表、)。

なお、2014年10月31日からはほぼ月に2回程度のペースで、Forbes Blogにおいて、英語でアベノミクスを含む日本経済の現状について発信を行っている(<https://www.forbes.com/sites/mwakataba>

e/)

(7) この研究の意義は、第一に、これまで経済学的観点からの研究が多数を占めていた90年代日本経済の研究に、経済政策思想と経済政策の関連という経済思想史的な観点を加えたところにある。第二に、アベノミクスと関連付けることで90年代の日本の経済危機の研究が現代の日本経済、そして2007年からの経済危機を理解する上でも重要なことを示したことである。

なお、図書については、現時点で二つの書評が英文学術雑誌に寄せられている。そのうち、国際経済学・経済史・大恐慌研究の泰斗であるバリー・アイケングリーン教授(カリフォルニア大学バークレー校)からは、"the best book to date on the Japanese economic crisis and Shinjo Abe's campaign to resolve it"として高い評価を得ている(*Japanese Journal of Political Science*, 17(1), 178)。またクレイグ・フリーマン教授(ミドルベリー・カレッジ)からは"Wakatabe's book, then, is more than just a way to come to grips with Japan's economic malaise. The volume provides valuable insights into how policies go wrong. The usefulness and parallels to other regions should become abundantly clear, especially in these days when many people puzzle over the strange birth and subsequent consequences of the Eurozone"として、他の経済危機の理解にも有用であるという好意的な評価を得ている(*Journal of the History of Economic Thought*, 38(4), 517)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

WAKATABE, Masazumi, The Great Depression and Macroeconomics Reconsidered: The Impact of Policy and Real-World Events on Economic Doctrines. *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Forthcoming in 2017. 査読有。

[学会発表](計 9 件)

WAKATABE, Masazumi, Japan's Great Stagnation and Abenomics: Can Japan Become a Success Story Again?" Paper presented at Western Economics Association International, Portland, Oregon, July 2, 2016.

WAKATABE, Masazumi, Economic

Controversy in Popular Discourse: The Case of Japan" Paper presented at the 43rd annual meeting of the History of Economics Society, Durham, USA, June 18, 2016.

WAKATABE, Masazumi, Japan's Great Stagnation: An Intellectual History Perspective. 経済学史学会第80大会、2016年5月21日、東北大学。

若田部昌澄、緊縮はなぜ魅力的で危険な思想なのか? 『緊縮策という病』を読むケインズ学会、2015年11月28日、立正大学。

WAKATABE, Masazumi, Keynesianism in Japan, 経済学史学会第79回大会、2015年5月30日、滋賀大学。

WAKATABE, Masazumi, Economic Controversy in Popular Discourse: The Case of Japan, Paper presented at the 19th annual meeting of the European Society for the History of Economic Thought, Rome, Italy, May 14-16, 2015.

若田部昌澄、日本の大停滞とアベノミクス、日本応用経済学会、2014年11月15日、中央大学(多摩キャンパス)招待講演。

WAKATABE, Masazumi, Structural Reform in Japan: An Intellectual History, 経済学史学会第78回大会、2014年5月24日、立教大学。

WAKATABE, Masazumi, Turning Japanese? Lessons from Japan's Lost Decade to the Current Crisis, Paper presented at the 40th annual meeting of the History of Economics Society, Vancouver, Canada, June 21, 2013.

[図書](計 6 件)

アベノミクス批判の経済思想史、中央大学出版部、中央大学経済研究所編『日本経済の再生と新たな国際関係』、2016、91-116

WAKATABE, Masazumi, Palgrave Macmillan *Japan's Great Stagnation and Abenomics*, 2015, 224

若田部昌澄、PHP 研究所、ネオアベノミクスの論点、2015、235

WAKATABE, Masazumi, "Is there any cultural difference in economics?: Keynesianism and Monetarism in Japan," in Toichiro Asada ed, *The Development of Economics in Japan*, London and New York: Routledge, 2014, 134-154

WAKATABE, Masazumi, Routledge, "'The Lost Thirteen Years': The Return to the Gold Standard Controversy in Japan, 1919-1932," in

Toichiro Asada ed, *The Development of Economics in Japan*, 2014, 13-38
若田部昌澄、日本経済新聞出版社、解剖
アベノミクス、2013、204

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

若田部 昌澄 (WAKATABE Masazumi)
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：00240440

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()